

唐詩における曹植・丕詩の影響について

——杜甫「旅夜書懷」などの詩を中心として——

上野裕人

はじめに

盛唐の杜甫（七一二～七七〇）は、卓越した表現と作品の底に流れる一貫した人間性などにより、現在まで中国の一二位と評される詩人である。彼には三国時代の魏の曹植（一九二～二三二）や曹丕（一八七～二二六）に言及した詩が見られる。例えば「寄張十二山人彪三十韻」の詩では、「曹植 前輩休む張芝 更に後身あり」と張彪の詩を賞めるのに、あなたの詩は、曹植でさえ詩の先輩の資格が無くなると詠っている。これは曹植の詩が劣っているというわけではなく、優れた詩人の曹植でさえあなたの足下には及ばないと、張彪を讃えるための誇張表現である。さらに「贈特進汝陽王二十韻」の詩では、「已に曹植に帰するを忝くす」と述べ、私は昔の王粲（一七七～二一七）のように、曹植といえるあなたに身を託しますと、杜甫自身を王粲に、汝陽王（？～七五〇）を曹植に例えている。ここでも建安七子の王粲と、建安詩壇の中心人物だった曹植とを対比させることで、汝陽王に対する尊敬を端的に表している。また、「奉寄高常侍」の詩では、高適（？～七六五）に対し、「駕を曹劉に方ぶるは音に過ぐるのみならず」として、あなたの才

能は曹植や劉楨（？～二一七）と並走しても遠くに引き離すほどだと讃えている。ここでも曹植や劉楨を用いたのは、この二人の才能を高く評価しているからに他ならない。次の例は高適から十年前に贈られた詩を、彼の死後に帙中から見つけて追和した詩「追酬故高蜀州人日見寄」に見られる。そこには「文章曹植波瀾闊く」とあり、漢中王の文章はまるで曹植のように波瀾に富んで優れているとして、ここでも曹植が例えに使われている。拙論では、右のように優れた詩人の例えとして用いられた曹植や曹丕の詩が、表現や構成の上から、杜甫の作品にどのような影響を与えているかについて考察していきたい。

一 「偶題」への影響について

杜甫には「偶題」という五言四十四句から成る作品がある。この詩は内容から後述の「旅夜書懷」（七六五年 杜甫五十四歳）と制作時期が近いと考えられる。この詩には「文章」と「名聲」という詩句が使われており、そこに作者の考えがよく表れている。長篇なので前半部分に当たる第一句目から第二十句目までを引用する。

文章千古事 文章 千古の事

得失寸心知 得失 寸心知る

作者皆殊列 作者 皆殊列なり

名聲豈浪垂 名聲 豈に浪りに垂れんや

騷人嗟不見 騷人 嗟見えず

漢道盛於斯 漢道 斯に盛んなり

前輩飛騰入 前輩 飛騰して入る

餘波綺麗爲 余波 綺麗と爲る

後賢兼舊制 後賢 旧制を兼ね

歷代各清規 歷代 各清規あり

法自儒家有 法は儒家より有し

心從弱歲疲 心は弱歲より疲る

永懷江左逸 永く懷ふ江左の逸

多病鄴中奇 多く病ましむる鄴中の奇なるを

騷驥皆良馬 騷驥りよき 皆良馬

麒麟帶好兒 麒麟 好兒を帶ぶ

車輪徒已斲 車輪 徒らに已に斲す

堂構惜仍虧 堂構 仍ほ虧けたるを惜しむ

漫作潛夫論 漫りに作る潛夫論

虛傳幼婦碑 虚しく伝ふ幼婦の碑

文章は千年後まで残る事業であるが、その巧拙は作者が心中で知るだけである。古来から作者は高位の人ばかりで、彼らの名声は理由もなく世間に伝わったわけ

ではない。昔の楚の屈原一派の人たちはもう見られないが、漢代から文章の道が盛んになった。漢魏の多くの先輩はその漢道に奮い立って入ったが、その余波の六朝時代には綺麗な文章へと変化していった。それ以降の賢人も前の時代の体制を兼ね備え、時代毎に清新な規律が備わっていた。私は文章の法を儒家の祖父から修得し、若い頃から文章に苦心してきた。私は常に六朝の文人の優れた才能を思い、鄴中の文人の非凡な様子を見て自分の才能不足を嘆いてきた。彼らは皆騷驥の良馬であり、また好兒を連れた麒麟で父子共に優れた才能を備えていた。『莊子』に見る車輪作りの扁と同しく私も秘伝を子に伝えられず、父祖三代で作る堂構も欠けたまま建て増しできないことを惜しんでいる。王符の『潜夫論』のように私も時政を論じたが、黄絹幼婦と伝えられた邯鄲淳の曹娥碑の文章の妙を伝授することはできそうにない。

最初の「文章 千古の事」という詩句は、詩ではないが曹丕の『典論』論文篇（以下『典論』と表記）にある「文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」からの影響を受けている。さらに四句目の「名聲豈に浪りに垂れんや」も、『典論』の「是を以て古の作者は身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見し良史の辞を仮らず、飛び馳するものの勢ひに託せずして、声名は自ら後に伝はる」を踏まえており、書物上に自己を表現することで名声が

後世に伝わる^(注)としてゐる。ただし『典論』では、「而も文は一体に非ざれば、能く善を備ふる^{すくみ}こと鮮し。是を以て各長ずる所を以て、短とする所を相軽んず。里語に曰く、家に敝^{やぶ}れたる帚有り、之を千金に^{みつゝ}享ると、斯れ自らを見ざるの患ひなり」として、文章が一つの形式ではなく、自分の得意な文だけを偏つて見るため、他人の短所を軽んじてしまうと述べてゐる。しかし、杜甫は詩の中で「永く懐ふ江左の逸 多く病ましむる鄴中の危なるを」と述べ、六朝詩人の前では才能の乏しさを自覚しており自分の欠点を充分に把握してゐた。この句も『典論』にある「蓋し君子は己を^{まじひ}審らかにして以て人を度^{はか}る」という句から影響を受けて、自身を謙遜したと考^(注)えられる。さらに、杜甫の「驂騑 皆良馬 麒麟 好兒を帶ふ」の詩句では、「諸家たちは皆千里の名馬であり、曹操・曹丕・曹植父子のように才能が抜きんでてゐる」と表現してゐる。この句も、『典論』に建安七子が「学に於いても遺す所無く、辞に於いても仮る所無く、威^{みな}へらく、自ら驂騑を千里に馳せ、仰いで足を齊しうして並び馳す」とあるのを踏まえてゐる。加えて『典論』では、「諸を^{これ}音楽に譬ふれば……巧拙に素有り。父兄に在りと雖も、以て子弟に移す能はず」と述べてゐる。杜甫はこの句に呼応して「車輪徒らに已に断す 堂構 仍ほ虧けたるを惜しむ」と妙技を子どもに伝授できないことを嘆いてゐる。杜甫の詩句は、「輪扁輪を堂下に断^きる……臣以て臣の子に^{まじ}諭すこと能はず」という「莊子」天道篇が^(注)出典になつてゐる。『典論』では音楽の伝承を例えにしてゐるので、杜甫は意図して意味は同じでも例えが違ふ

車輪作りの話柄を用いたのではないか。『典論』の『文選』李善注では、『桓子新論』の「父以て子に禪^つる能はず、兄以て弟に教ふる能はざるなり」を注引しており、曹丕の句は『莊子』以外の出典と考えられるからである。

以上のことから「偶題」の詩は曹丕の『典論』を主な出典としてその句を踏まえながら、加えて杜甫の独創的な表現を工夫して作られたと言える。

二 「旅夜書懷」への影響について

杜甫には、晩年に近づいた五十四歳の時に作られた「旅夜書懷」という五言律詩がある。次に掲げるのは、その全文である。

細草微風岸	細草	微風の岸
危檣獨夜舟	危檣	独夜の舟
星垂平野闊	星垂れて	平野闊く
月湧大江流	月湧きて	大江流る
名豈文章著	名は豈に	文章もて著はれんや
官應老病休	官は応に	老病にて休むべし
飄飄何所似	飄飄	何の似たる所ぞ
天地一沙鷗	天地の一	沙鷗

細くか弱い草がそよ風に揺れ、高い帆柱を抱く船の中心で夜更けまで一人眠られずにいる。今夜は星が地上まで降りたように輝き平野が隅々まで見渡せる。さらに

月が上り月光を反射した川の流れが目映る。人間の名声は文学などによって現れることはなく、老いて病気がちの私は、官職を辞するのが当然である。あてもなくさ迷うこの身は、一体何に似ているというのか。それは天と地との間を何処までも果てしなく飛び続ける一羽の沙鷗こそが私自身と言えるのだ。

まず首聯第一句目の「細草 微風の岸」について、詩人の心には鵬が旋風を巻き起こして飛び立つ時のような激しい風は吹いていない。若くして逝った天賦の才を持つ曹丕や曹植の詩にも風の表現が見られるが、その多くは決して穏やかな風ではない。権力闘争の中心にいる者の心境としては、「高臺に悲風多く 朝日北林を照らす」（曹植「雜詩」其一）や「高樹に悲風多く 海水はその波を揚ぐ」（曹植「野田黃雀行」）、また、「漫漫として秋夜長く 烈烈として北風涼し」（曹丕「雜詩」二首其二）のように常に強風が吹き荒れているようである。他にも「溪谷 風多く」（曹丕「善哉行」二首其一）や「風飄 蓬飛し」（曹植「朔風詩」）、「強風 白日を飄し」（曹植「箜篌引」）、「震雷 風吹いて且つ寒し 樹を抜きて秋稼を偃し」（曹植「怨歌行」）、「卒に回風の起るに遇ひ 我を吹きて雲間に入る」（曹植「吁嗟篇」）など、多くの場合に突風が樹木を引き抜いたり、太陽まで吹きひるがえしたり、海水は高波となったり、果ては自分まで天高く吹き飛ばされたりと風が吹きつける対象に甚大な影響を与えている。ところが杜甫の詩では、逆に風が静かにそ

よく情景が描かれている。作者は川に浮かべた舟から岸辺を見ているため、丈の低い草ならほぼ目の高さに見えたのだろう。そのため、草がかすかに風にそよぐ様子さえ確認できたに違いない。この詩には、強風を受け易い高樹は描写されず、丈の低い、か細い草が描かれるだけである。前述した多くの「風」の表現からの影響はないというより、曹植・丕詩に対し杜甫の独自性を打ち出すために「細草」と「微風」という詩句を工夫したのではないか。「風」について言えば曹植・丕詩の中には「微風」という表現は見られなかった。

また、どこから杜甫は「細草」と「微風」とを組み合わせた表現の着想を得たのだろうか。『論語』顔淵篇の中に「君子の徳は風なり。小人の徳は草なり。草之れに風を上ふれば必ず偃す」（君子の徳は風であり、小人の徳は草である。草は風を受ければ必ずなびくものです）という文がある。ここでは杜甫は自身を「細草」に、そして隠れてあまり姿を現さない聖人の徳を暗に「微風」と表現したのかもしれない。もちろん目の前の実景をそのまま描写していると考えられるが、先の詩人たちがあまり用いないような独創的な表現であることと、情景描写の中に比喩を巧みに取り入れた技法と言えるのではないだろうか。第二句目の「危檣 独夜の舟」について、作者の心は旅の愁いに満ちて今夜は一人眠られずにいる。おそらく舟中ですわっているのだろう。立っただけでも高く感じる帆柱が、すわっているため、さらに高く見上げるような描写になっている。その高い帆柱は、満天の星の中に時間の流れの指標としてそびえ立つ。

天頂まで届く指針は、星が周回し月が上って沈んでゆく時間の流れを計る北極星と同様な不動の基準点となっている。

続く頷聯の「星垂れて平野闊く 月湧きて大江流る」の詩句を、曹丕「雜詩」二首其一の第七句目・第十句目と比較してみよう。その詩は「俯して清水の波を視、仰いで明月の光を看る。天漢回^{めぐ}りて西に流れ、三五正に従横」と詠っていて、最初に月の光を描写して、次に星を描写しているが、杜甫の詩ではその順序を逆にして詠っている。^(注19)さらに曹丕の詩では、「俯^{うつ}いて静かな波に映る光を視てから、仰いで明月を見上げて」いるが、杜甫の詩では「月が上ったのを見上げてから、俯いて大江が流れていることに気づく」のであって、ここでもわざわざ順番を変えており、曹丕詩を参考にしながら工夫を凝らしたのではないだろうか。ここでは曹植詩にある「海水は其の波を揚ぐ」などの激しい波とはうって変わり、月光を映し出すような穏やかな波が描写されている。これも実景であろうが、星や月を曹丕や曹植などの優れた詩人に例えることができるかもしれない。彼らは大地のように広がる数多の詩人や陸続と生まれる大江の流れのような詩人たちを照らす光と見なせるのではないか。この四句目の情景は、川面に月光が反射したことで初めて川の流れに気づくのである。『論語』子罕篇にある「子、川^{はら}の上に在りて曰く、逝く者は斯くのごときかな。晝夜を舍かず」と孔子が述べた時は、「子」の前後に夜という時間を示す語がないため陽光の下で川の流れを見たはずである。杜甫の場合は、これとは逆の夜に月光に反射する川を見て『論語』の章句が浮かん

だかもしれない。^(注20)後述するが、ここでは『論語』と同じく川の流れに悠久の時間の流れを見ているのであろう。

この星と月の描写も、先述した例の他に曹操の「短歌行」二首其一の「月明らかに星稀に 烏鵲南に飛ぶ」や曹丕の「燕歌行」二首其一にある「明月皎皎として我が牀を照らし 星漢西に流れて夜未だ央まず」の句を彷彿とさせる。^(注21)そして、風も弱く波も静かな情景の中で、しみじみと半生を振り返り、過去から現在、そして未来へと続く杜甫自身の生きざまを深く省みたのではないだろうか。

頷聯では、杜甫は若くして人生を駆け抜け、不朽の文学を打ち立てた天才詩人たちと、志を遂げることができない自分とを比較して、「名は豈に文章もて著はれんや」と嘆息する。ここで使われる「名」と「文章」は、先の「偶題」の詩でも「名聲」と「文章」のように対にして用いられている。曹丕の『典論』では、「蓋し文章は経国の大業にして不朽の盛事なり」とあり、対する杜甫の「旅夜書懷」においては、「名は豈に文章もて著はれんや」とし、先に掲げた『典論』の次段落にある「是を以て古の作者は身を翰墨に寄せ、意を篇籍に見し、官吏の辞を借らず、飛び馳するものの勢ひに託せずして、声名は自ら後に傳はる」とは反対の主張をしている。つまり名声というものは、すばらしい文章が作成できれば自ずから世間に知られ、誉め讃えられて後世に伝わるものだという主張に対して、けっしてそうではないと否定する。さらに杜甫の次の詩句では、「官は応に老病にて休むべし」と述べる。これは『典論』の「年寿は時

有りて尽き、榮樂は其の身に止まる」と呼応している。^(註2)さらに『典論』の「日月は上に逝き、体貌は下に衰へ忽然として万物と遷化す」の後半部分である「体貌は…遷化す」にも影響を受けていると考えられる。^(註3)また前半の「日月は上に逝き」の部分は、杜詩の領連にある「星垂れて平野闊く 月湧きて大江流る」の描写と対応し、単なる情景描写ではなく大きな時間の流れをとらえていると見るべきである。つまり、今まで見えなかった大江の流れが月光の反射により目に映じて、流れ去る川が二度と戻らぬ悠久の時間の流れとして実感できたのであろう。

なお、ここで改めて「文章」の意味について考えておきたい。「与呉季重書」の中で曹植は、「其の諸賢の著はす所の文章、想ふに所治に還りて復た之を申詠せん。事を惹ひむ小吏をして諷して之を誦せしむべし」(あの時、諸賢が作られた文章はそれぞれ赴任先へ帰ってからもお互いに繰り返し朗唱して友人達を忍んでおられるでしょう。文学を愛好する志のある部下の役人たちに諷誦させるとよいかと思ひます)と述べているが、ここで言う「文章」とは、手紙などを含むやや長めの文章であると思われる。^(註4)

杜甫の用いた「名は豈に文章もて著はれんや」の「文章」は、『典論』で曹丕が考えていた「一家の言を成す」ような長篇の著述の文章を指しているのではなく、杜甫の作る「詩文」を指しているのではないかと思われる。つまり、先の「偶題」で先人たちが名声を博した「文章」と、この詩の「文章」の意味とは異なっていると思われるのである。それは、先の曹丕自身も

『典論』の中で、「而も文は一体に非ざれば」と言っているからである。杜甫は老いと病とのために官も辞しており、すでに上奏文などの長文の意見書を奏上すべき立場にはなく、またそのチャンスさえ越権行為となるため奪われているからである。

さて最後の尾聯について、夜の岸辺でよく見られる群れで眠る水鳥を杜甫は描写することはなかった。それは詩は志を表すものであり、杜甫の慷慨の気持ちは厳しい環境においても衰えを知らなかったからである。杜甫の心情は眠れぬまま、早く夜が明けることを待ち望んでいたのではないだろうか。彼には文学の世界の中を、生涯立ち止まることなく飛び続けたいという願望があった。安心して群れで眠る姿とは、その姿勢はほど遠いものだった。夜の闇を照らす星や月に変わって、白日の下で、自己の目標を目指し一羽だけで飛び続ける自分の姿を希求していたのではないか。

では、なぜここでは数ある鳥の中から鷗が詠われたのであるか。鷗は夜はたいがい飛ばない。杜甫は月明かりの下で輝く川を眺めていたので、水上に固まって眠る鴨なども目に映っていたであろう。あるいは、夜の闇に紛れて魚を捕らえに来る鷺などが水辺に佇む姿も視野に入っていたに違いない。しかし杜甫は、夜明けとともに辺りを飛び回る沙鷗に自分の心情を重ね合わせた。日が昇れば風も吹く。その風をとらえ自由気ままに飛び回る沙鷗こそは、天と地との広い空間を文学の世界に見立てたとすれば、八方塞がりの杜甫の境遇から唯一自由に羽ばたける文学という空間に自身の魂を浮揚させることができる

考えたのではないか。だからこそ水辺に眠る鴨や静止している鷺などではなく、空中に飛翔して自由意志で飛び回れる沙鷗を選んだのだと思われる。

繰り返しになるが、もし杜甫が先人たちの詩を鑑みながら、自分を表現しようとする鳥を選ぶとき、それは生態系の頂点に立つ鷹ではないはずだ。彼は政治の中枢に関わっているわけではなく、また網にかけられて生死を他人の手によって左右される黄雀でもない。その「黄雀」の状態とは、杜甫が敬愛する李白を詠った「君今羅網に在り 何を以てか羽翼有るや」の詩句に象徴されている。しかし、すでに官職を辞した杜甫は羅網などにとらわれない自由の身である。その鳥は自らの意志によって、天地の間を自由に飛び回れなければならない。それは、あたかも戦乱を避けて船に乗り、中国各地を放浪した杜甫の人生そのものを象徴する鳥でもある。その鳥こそ「絶句」に「江碧にして鳥愈白く」と詠われ、「江村」にも「相親しみ相近づく水中の鷗」と描かれた鷗でなければならなかったはずである。さらにその鳥は、建安詩壇に君臨した曹植や曹丕の詩には、一羽たりとも登場していない鳥でなければならなかった。そうでなければ、「語 人を驚かさずんば死すとも休まず」と、一語に命を賭けた詩人杜甫が、杜甫である存在理由がなくなってしまうではないか。晩年に近づいた杜甫がこの詩に込めた心情は、尾聯に象徴される自由と生涯をかけて貰った詩人の誇りとを象徴する一羽の沙鷗の双翼に託されたのではないだろうか。

杜甫には自叙伝とも言える「壯遊」という五言百二十句から

なる長篇の詩がある。その中に「気は靡す屈賈が壘 目は短とす曹劉が墻」とあり、その頃の私は、屈原（BC三四三—二七七頃）や賈誼（BC二〇一—一六九）に対して戦いを挑まんばかりであり、曹植や劉楨に対しても自分より下に見ていたとあって、若い頃は唐代までの詩人の中で最高峰とされた曹植でさえ見下していたという。ところがいつしか歳を重ねるうちに、現実を目の前にして希望も破れ果てた。そして、曹丕や曹植たちが世を去った年齢をはるかに超えた今、わずかな余生を思い「名は豈に文章もて著はれんや」と慨嘆するのである。詩人として名を成し、ゆくゆくは政治家として世に貢献したいという願いも、官職さえ老病によって退いた今、「夢李白」二首其二で「千秋万歳の名は、寂寞たる身後の事なり」（永遠に伝わる不朽の名は李白のわびしい生前ではなく死後のことである）と嘆いた通り、杜甫もまた夢を死後に託すより他はなかった。それでも彼の心の中には「列子」に出てくる自由の象徴とも言える鷗が居り、心の慰めになってくれたに違いない。

あの夜からすでに千二百年、杜甫の魂を背負った鷗は今でも休むことなく飛び続け、牧水の「白鳥は」の歌を引くまでもなく、遠く離れた日本文学にさえ大きな影響を与え続けていることを思えば、詩人杜甫が命を賭して選んだ鷗はよくその任を果たしたと言えよう。

以上のことからこれまで見てきたように、杜甫の詩は曹植や曹丕の表現や構成を伝統として受け継いだ上で、彼自身の独創的な表現を常に工夫しながら作り上げてきたと言える。

注

- (1) 「曹植休前輩 張芝更後身 數篇吟可老 一字實堪貧」『杜甫詩詳註』唐 杜甫撰清 仇兆鼂註 上海古籍出版社 一九九二年十一月 二六一頁
- (2) 「已忝歸曹植 何如對李膺」前掲『杜甫詩詳註』二九頁
- (3) 「總戎楚蜀應全未 方駕曹劉不啻過」前掲『杜甫詩詳註』四四三頁
- (4) 「文章曹植波瀾闊 服食劉安德業尊」前掲『杜甫詩詳註』八一—八二二頁
- (5) 「偶題」前掲『杜甫詩詳註』六一〇—六一一頁
- (6) 蓋文章經國大業、不朽之盛事。『魏文帝集全譯』曹丕 著 易健賢 譯注 貴州人民出版社 一九九八年十二月 三二七頁
- (7) 是以古之作者、寄身於翰墨、見意於篇籍、不假良史之辭、不托飛馳之勢、而声名自伝於後。前掲『魏文帝集全譯』三二七頁
- (8) 而文非一体、鮮能備善、是以各以所長、相輕所短。里語曰、家有弊帚、享之千金。斯不自見之患也。前掲『魏文帝集全譯』三二一—三二二頁
- (9) 蓋君子審己度人。前掲『魏文帝集全譯』三二一—三二二頁
- (10) 於字無所遺、於辭無所假、咸以自騁驥跡於千里、仰齊足而竝馳。前掲『魏文帝集全譯』三二三頁

- (11) 譬諸音樂、曲度雖均、節奏同檢、至於引氣不齊、巧拙有素、雖在父兄、不能以移子弟。前掲『魏文帝集全譯』三二六頁
- (12) 「輪扁斲輪於堂上……臣不能以喻臣之子」『莊子集解』王先謙撰 中華書局 一九八七年十月 一二〇—一二二頁
- (13) 李善注引「桓子新論、惟人心之所獨曉、父不能以禪子、兄不能以教弟也」『文選』蕭統 編 李善 注 中華書局 一九七七年十一月 七二〇頁
- (14) 「旅夜書懷」前掲『杜甫詩詳註』四八四頁
- (15) 「雜詩」「高臺多悲風 朝日照北林 之子在萬里 江湖迥且深」『曹植集校注』趙幼文 校注 明文書局 一九八五年四月 二五一頁 「野田黃雀行」「高樹多悲風 海水揚其波 利劍不在掌 結友何須多」前掲『曹植集校注』二〇六頁 「雜詩」「漫漫秋夜長 烈烈北風涼 展轉不能寐 披衣起彷徨」前掲『魏文帝集全譯』四六四頁
- (16) 「善哉行」「溪谷多風 霜露沾衣」前掲『魏文帝集全譯』四〇四頁 「朔風詩」「風飄蓬飛 載離寒暑」前掲『曹植集校注』一七三頁 「箜篌引」「驚風飄白日 光景馳西流」前掲『曹植集校注』四五九頁—四六〇頁 「怨歌行」「皇靈大動變 震雷風且寒 拔樹偃秋稼 天威不可干」前掲『曹植集校注』三六二頁 「吁嗟篇」「卒遇回風起 吹我入雲間 自謂終天路 忽然下沈泉」前掲『曹植集校注』三八二頁
- (17) 曹植の詩の中に「風」を表現する詩句は、三十五句出てくるが「微風」という表現は見られない。一番多い表現は「悲風」で六回、次は「清風」が四回、次に「涼風」・「北風」が

それぞれ二回などである。

曹丕の詩では「風」の表現が十九句見られる。「隨風」(風に随ひて)が四回、「涼風」が二回などであり、やはり「微風」という表現は見られなかった。

(18) 君子之德風。小人之德草。草上之風、必偃。影璜川呉氏
仿宋刊本『論語集註』朱熹書籍文物流通會 一九五九年四月
「論語六」 十八頁

(19) 「雜詩」二首其一「俯視清水波 仰看明月光 天漢回西流 三五夜正縱橫」前掲『魏文帝集全譯』四六四頁

(20) 子在川上曰「逝者如斯夫、不舍晝夜。」『論語義疏』皇侃
中華書局出版 二〇一三年十月 一二四頁

(21) 「短歌行」月明星稀 烏鵲南飛 繞樹三匝『曹操集譯注』
安徽毫州「曹操集」譯注小組 中華書局出版 一九七九年
十一月 十九頁 「燕歌行」明月皎皎照我床 星漢西流夜未
央 前掲『魏文帝集全譯』三九〇頁

(22) 年寿有時而尽、榮樂止乎其身。前掲『魏文帝集全譯』
三二七頁

(23) 日月逝於上、体貌衰於下、忽然与万物遷化。前掲『魏文
帝集全譯』三二七頁

(24) 其諸賢所著文章、想還所治復申詠之也。可令憲事小吏
而誦之。前掲『曹植集校注』一四三頁

(25) 「夢李白」二首其一「君今在羅網 何以有羽翼」前掲『杜
甫詩詳註』二二三頁

(26) 「絶句」二首其一「江碧鳥逾白 山青花欲燃 今春看又過

何日是歸年」前掲『杜甫詩詳註』四四八頁 「江村(邨)」「清

江一曲村(邨) 抱流 長夏江村(邨) 事事画 自去自來梁上
燕 老妻畫紙碁局 稚子敲針爲釣鈞 但有故人供禄米(一作
多病所須惟藥物) 微軀此外更何求」前掲『杜甫詩詳註』
二九五頁

(27) 曹丕の詩には三十六篇のうち抽象的に「鳥」と表現され
た句が十句、さらに同じく抽象的に「禽」と表現された句が
三句、「鵠」が三句、「燕・「鴈」が二句ずつ、「鳳凰」・「鳳」・
「雞」・「雁」が一句ずつ詠われているが、「鷗」については詠
われていない。杜甫はやはり独自性を打ち出すため「鷗」を
意図して用いたのではないかと思われる。曹植の詩には
六十三篇のうち抽象的に「鳥」と表現された句が二十句、「雀」
が六句、抽象的に「禽」と表現された句が三句、「鴻」・「鵠」・
「鳩」・「鸞」・「燕」・「鴛鴦」・「鷄」が二句ずつ、「鷓鴣」・「鴛
鴦」・「穀」・「鷓」・「黃鳥」・「矛」・「雁」・「鷓」・「鷓」が一句
ずつ詠われているが、曹丕と同じく「鷗」については詠われ
てはいなかった。

(28) 「江上值水如海勢聊短述」為人性僻耽佳句 語不驚人死
不休 前掲『杜甫詩詳註』三二〇頁

(29) 「壯遊」氣靡屈賈壘 目短曹劉壘 前掲『杜甫詩詳註』
五六七頁

(30) 「夢李白」二首其二「千秋萬歲名 寂寞身後事」前掲『杜
甫詩詳註』二二四頁

(うえの ひろと・本学修了)